

第 49 回創大祭・第 35 回白鳥祭「創価栄光の集い」記念講演

ケネス・M・プライス

本年は、池田大作博士が愛読された詩人ウォルト・ホイットマン生誕 200 周年の年に当たります。

ホイットマンと池田博士——二人は共に詩人であり先駆者であり、平和の大義を推し進めた類いまれな人道主義者でありながら、思想のパイオニア（開拓者）でもありました。

池田博士はホイットマンがそうであったように、過去、現在、未来の関係性について思いを巡らすことを私たちに奨励してくださっています。新しい千年の幕開けとなる 2000 年 1 月に発表された長編詩「滝山城址に立ちて」の中で、博士は、「過去の戦争のフォートレス」と「平和のフォートレス」、つまり「滝山城」と「創価大学」との関係について思いを馳せておられます。

この長編詩のキーワードとなるのは題名にある「城址」という言葉と考えます。私は池田博士の、課題（目前の挑戦）、破壊、損失、そして敗北に対する真つすぐな受け止め方に敬意の念を持ちました。また、再び築き上げ、勇気をわき立たせ、前向きに進むとの決意にも感嘆しました。

池田博士の作品の論調は通常、勝利のそれであり、暗たんたる悲しみや喪失感のそれではありません。

池田博士は第 2 次世界大戦終了直後に（ホイットマンの名作）『草の葉』を読まれましたが、その時の体験を自ら伝えてくださっている次の内容は、実に啓発的であります。

「敗戦後の占領下にあって——一人の貧しい青年であった当時の私は、この詩集とのめぐり合いを、今は懐かしく感謝している。私は、そのころの騒然たる灰色の風景のなかで、この書によって、未来を展望する術を知った時、感動は愛着に変わった。私は好きな詩をいくつも暗誦し、深夜家路をたどる時など、思わず小さな声で朗誦しさえした。ある時は、疲れた体を、神宮外苑の芝生の上に投げ出し、手にしたこの詩集に読み耽った秋の日もあった」

この池田博士の文章は「城址」という言葉に表現される、敗北に対する健全な反応を見事に描写しています。私たちは皆一様に、心騒がすような不安の原因となる挫折や運命の逆転のような出来事に直面するものです。

また、最悪の場合、その挫折があまりにも衝撃的過ぎるために、自身の人生は二度と正常な状態に戻せるかどうかとも確かではなくなる時さえあります。

Kenneth M. Price（ネブラスカ大学リンカーン校教授）

ホイトマンは彼の楽観主義と寛大な精神ゆえに、池田博士に興味深い事例を提供することとなったわけですが、それは、ホイトマン自身も計り知れない喪失感を自国アメリカの南北戦争で経験していたからです。同じ国の北部と南部、奴隷制度のある奴隷州と、ない自由州の間で行われた戦争がもたらした死者の数と環境破壊の規模は世界大戦にも匹敵するものでした。

同じく池田博士にとって、第2次世界大戦は凄惨な出来事でした。博士のお兄さまの一人は戦死されました。他の三人は帰還されますが、帰還したふるさと日本はかつての姿をとどめていませんでした。

混乱の様相に加え、一家は空爆により住居と家財を失いました。そういった意味では、悲しくも、当時の池田家は他の何千もの家族と同じ経験をしていたことになります。

池田博士は、アメリカの文筆家、それもラルフ・ウォルドー・エマソンやヘンリー・デイヴィッド・ソローのようなニューイングランド地方の超越主義者に深い関心を持たれましたが、特に敬意を寄せられたのが彼らと同年代のニュー Yorker、ウォルト・ホイトマンでした。博士はかつてエマソンとホイトマンを「共に語り 心を通わせし」存在であったと書いていらっしゃいます。

ホイトマンを称賛する随筆「人間の魂に触れる詩 ホイトマン『草の葉』」の中で池田博士は、22歳の時に富田碎花の和訳によるホイトマンの作品を読んだと書かれています。同随筆の最初の2行で博士は、ホイトマンと「庶民」のつながりについて強調され、『草の葉』のこの点が、まさに博士が本作に敬意を寄せる理由であることを明示されています。博士はまた、ホイトマンは「雑草のように強く逆境にも怯まなかったとも書いておられます。

そして池田博士はさらに、次の文章で自嘲気味ながらも魅力的に、ご自身もまた雑草であると表現されています。

「高尚な一時的な花よりも 私は 生命力強靱な 雑草の如き人生で 生きぬきたい」

ホイトマンも池田博士も明瞭さと親しみやすさと気取らない姿で庶民一人一人とつながることを望んでいます。

ホイトマンの気取りのなさは兵士たちを慰問している時の彼の様子の中にも見ることができます。アメリカの南北戦争ではワシントンDCが他のどの都市よりも多くの負傷兵を受け入れ、治療していました。何十もの病院を見舞ったホイトマンは苦悩の中心部へと引き寄せられました。中でも、最も傷病の状態が悪い兵士が収容され、死亡率も最も高かったアーモリー・スクエア病院を、ホイトマンは繰り返し訪問しています。

未だかつてない殺戮と暴力の時代にホイトマンが没頭したのは「癒やし」という作業でした。戦時中に急場で作られたワシントンの野戦病院などの病院で、ホイトマンは心配りと小さな親切と愛情で痛みを和らげ、癒やしを施し、一つでも多くの生命を救おうとしたのです。

ホイトマンにとって、こうした戦時下の病院への慰問は、人生最悪の経験でありながらも、皮肉なことに最も有意義な経験ともなりました。この間、彼は最も表現力豊かで感動的な手紙を書き、「戦場レポート」という新しいジャンルの誕生を手助けし、生々しい情報のかけらや落書き、

兵士から聞いた話や戦争に関する心打つ詩や散文の草稿などでノートを埋めることもなったからです。

一方、病院にいる時のホイットマンは、自称「負傷兵のための伝道師」でした。(歴史学者でハーバード大学初の女性学長でもあった)ドルー・ギルピン・ファウストが「十九世紀アメリカ人の価値観や世界観を形成していたのは宗教だった」(『戦死とアメリカ』黒沢眞里子訳、彩流社)と言っているように「宗教」は戦争に関する解釈を大きく形作っていたと言えるでしょう。

戦争への勝利を神に懇願することや戦死した兵士を殉教者として描写することが日常的な行為となっていたその当時、ホイットマンは癒やし、思いやり、深い嘆き、愛情と回復に聖なる意義を見いだしたのです。それでもなお、彼が「伝道師」との印象的な言葉で自らを表現したことには奇妙さを感じざるを得ません。

「伝道師」という言葉は病院における彼の取り組みに重要な枠組みを与えてくれるものであり、南北戦争への彼の貢献のうわべの部分飾るためにも使える表現ではありますが、この言葉はまた、詩人として、また文化理論の研究者として、彼が心に抱いていた最大の志を明らかにするものであるともいえましょう。

池田博士は、自らの取り組みとホイットマンのそれとのつながりを正しく捉えておられるといえますが、それは博士が、この先達の使命をさらに拡大し、発展させておられるからです。このことは、博士がホイットマンに捧げる詩として書かれた「昇りゆく太陽のように」の次の文章でも明らかです。

「あなたの掲げた『民主の旗』を『自由の旗』を 私はしっかりと握りしめ さらに さらに 戦い 進もう！ 精神の荒野の開拓者として この詩人のめざした道を 果てしなき使命の旅路を この地球の全土に 友情の大道を幾重にも開き 心と心とを結び 人間の凱歌を 高らかに響かせるために」

池田博士にとって、戦争の痛みと苦悩への認識が、博士の極めて重要な平和主義へとつながっていきました。加えて、博士の戦争に対する認識は、より实际的で具体的な形として、世界に恩恵をもたらすことにもなりました。

それは平和主義の確認の行動として創立された創価大学であり、未来を担う世代の激励という行動でもあります。池田博士の詩から放たれる楽観主義と心を鼓舞する特性には驚くべきものがあります。ホイットマンと池田博士は灰から再び立ち上がり、使命(mission)にその生涯を捧げたのです。ホイットマンは、戦前も戦後も宗教上の使命を帯びた「伝道師(missionary)」に対しては疑念を抱きながらも、戦争中は自らが「負傷兵たちの伝道師」となったことでも、それが証明されています。

ホイットマンは『草の葉』を著す前の 1840 年代、文化を擁護するよりもむしろ破壊しようとの決意が感じられるとの理由で、ジャーナリストとして伝道師たちを批判していました。彼の「伝道師」としての姿勢は型破りなものでした。未知の土地に向向いて有色人種を改宗させるのではなく、米国の首都であるワシントンDCに向向き、主に同胞の白人の看護に努めたのでした。そ

して、異質と断じ、その文化を破壊しようとする代わりに、寸断の危機に喘ぐ文化が包摂的民主主義に向かってむしろ構築されるための手伝いをしたのです。

もしほとんどの伝道師の仕事が帝国主義の最前線で行われていたのであれば、ホイットマンは（そこからかけ離れた）医療、精神性、社会性や性の最前線に自らの仕事の間を求めたでしょう。また、もし通常の伝道師が改宗と魂の救済を目指していたのであれば、ホイットマンは、むしろ、人間はすでに神に準じる神聖な存在と考え、それゆえに、今世でその人間の力になることに集中したでしょう。

彼は魂を心から大切に思っていました、通常の型にはまった考え方とは異質でした。ホイットマンにとって、肉体と魂は絡み合って存在するものであり、相互に構成する存在でありました。つまり、魂は肉体から切り離せるものではなく、肉体は神聖なものとしたのです。また、肉体が完璧な状態にあるがなかり、それはとてつもなく大事なものであり、ずたずたの状態にあっても、弱っていても、病んでいても、はたまた傷のために損なわれていたり、切断されていても、ホイットマンはそれを敬愛しました。

池田博士は平和実現の使命のもと、その活動に自らの生涯を捧げられました。一方、その挺身と一貫した姿勢で、また自らの使命の一つとして、創価大学を創立されました。博士は長編詩「瀧山城址に立ちて」の中で、次のように感動的に詠み上げておられます。

「できることは 何でも してあげたい 創価大学は 私の生命であり 三世に生き抜く 同志であるからだ！」

池田博士もホイットマンもそれぞれに「一生の仕事（ライフワーク）」を見つけることになったわけですが、それはいずれも多大な集中力と情熱をもって生涯を捧げられるものでした。

ホイットマンにとってのライフワークは戦争の傷を癒やすことでしたが、それは現実的には病院という現場で実行され、『草の葉』を書くことを通じて具象表現もされたのです。

池田博士のライフワークは平和の行動を前進させ、創価運動を発展させ、次世代の育成に尽力することです。

ここで皆さん方に課題を投げ掛けたい。あなたが生涯を捧げること——ライフワークと呼べることは一体何でしょう？ やりがいを感じ、世界を助け、個人に留まるものではない報われた達成感ややりがいを感じられる——そうした何十年もの月日を費やすことができる自らの献身の対象は、一体何でしょうか？

ホイットマンは晩年、友人のホレス・トローベルとの会話の中で、戦時下の病院での取り組みについて次のように述べています。

「仕事を放棄する権利や理由があるとは全く思いもつかなかったよ。それは私にとっての宗教であり信仰のようなものだったんだ。宗教？と思うかもしれない……でも、まあ、人間は誰であれ信仰というものを持っているよね。それが天に存在しようが、地に存在しようが、他の全てを捨ててもかまわないと思う何かを持っているものだ。わが身を夢中にさせ、わが身にとって一番大切なものとなり、わが人生を形成する根幹となる何かをね。

他人から見れば取るに足りない、不適切、無用と思われるものかもしれないが、それは夢であるし、自身にとっての北極星であり、主でもあるんだ。それが何であれ、私をとらえ、私を僕にしたんだ。そして、他の野心を全て横に置くよう私を勧誘し、説得した。天における栄光の軌跡をとにかく私はたどった。心から喜んでその軌跡をたどったんだ」

北極星の僕となったホイトマンは、同時代の著名な看護師とはかなり違った類の看護師でした。「同時代の著名な看護師」とはフローレンス・ナイチンゲールやクララ・バートンのことですが、両氏ともにホイトマンの異質性を描写する上で有効な比較対象人物といえます。

ナイチンゲールもバートンもその最も顕著な貢献は組織的なものでしたが、それとは対照的に、ホイトマンの最大の貢献は個々の兵士の側で提供されるものでした。ホイトマンは自ら書いている通り「必要に応じて、精神と肉体のある程度の支えとなった」（『ホイトマン自選日記〈上〉』杉木喬訳、岩波書店）存在でした。彼は（負傷兵たちの）話し相手となり、癒やしのぬくもりを提供し、多くの兵士が軍事組織の冷淡さや墮落を認識し始めていた時期に、一人一人の兵士に心を配ったのです。彼のアプローチは極めて個人的なものであり、また特異なものであり、他の誰もが追従できるようなひな型を提供するものではありませんでした。

しかし、ホイトマンのアプローチは意義ある成果をもたらしました。死亡率が最も高く、ホイトマンが一番多く時間を過ごしたアーモリー・スクエア病院の軍医長（で銃創専門医）のウイラード・ブリスは述べています。

「私が個人的に知るホイトマン氏のアーモリー・スクエアや他の病院における労作業ですが、戦時中の病院であそこまで兵士、そして政府のための助けとなる行動をやり遂げてくださった人物はホイトマン氏をおいて他にはいません」

そういう意味では、池田博士はホイトマンとは大きく違います。博士は他の人々が続くことができるよう、ひな型、テンプレート（基本形）を提供されます。博士は人生を向上させるための秩序化プロセスを体系化することに関心をお持ちです。博士は師匠・戸田城聖氏のように、創価の組織的構造に強度と結束力をもたらす複雑な相互作用を生む共感のコミュニケーション体系を、さらに発展させることを決意されていたのです。その共感のコミュニケーション体系を通じて伝えられる池田博士の詩は、自己発見と自己形成を可能とすることを目的とされています。

博士の詩は多くの人に、しかし、個人の深い部分に語り掛けます。より優れた自己を達成するための指針を提供し、私たちの中に潜在する善の部分呼び起こしてくださるのです。

ただし、その後に起きる変化は個人に留まるものではないことは、池田博士の次の著作の題名にも明らかです。

「The World Is Yours to Change」——君が世界を変えていく。

ありがとうございました。